



面白いことに、私は仏教徒であることが判明しました

去る3月26日、青木総長の主催する「法話の時間」というワークショップに参加する機会を得ました。その中で青木総

長は「あなたにとって仏教とは何なのか」という問いを投げかけられました。私にはその答えは他の色々な質問に対しても答えられる、中心的なものであると思えました。例えば「それは全て本当にそこにあるのか」「見たり触ったりできるもの以上のものは存在するのか」「私たちは死んでしまっただらどうなってしまうのか」といった問いかけなどに対する答えになります。

私はその時その瞬間に初めて自分が仏教徒であるという自覚が持てました。それまでは自分を仏教徒であると自称しても良いものか自信がありませんでした。そのワークショップの後に、私がどれだけお寺と教えを説いてくださった僧侶の方々に感謝しているのかを、少し時間を取って再確認しました。子供たちに教え伝えていくことの出来るしつかりとした道徳的規範を浄土真宗が提供して下さっていることに気づき、私はより一層感謝の念を抱きました。お寺の運営またはボランティアの一員として、今後もこの感謝の念を行動として示していけるように、最大限の努力を以てお寺を支えていきたいと思えます。

合掌

片岡キャリー



平成28年熊本地震に関する総長談話

2016(平成28)年4月14日に発生した「平成28年熊本地震」により被災された皆様に衷心よりお見舞い申しあげます。

このたびの地震によつていのちを失われた皆様、さらには「ご遺族の皆様へ、心から哀悼の意を表します。また、被災され避難生活を余儀なくされる方、ご縁の方の安否を気遣い不安の中におられる方の心情をお察し申しあげますとともに、安否が定かでない方が一刻も早く救出されますことを願っております。

宗門では、地震発生直後から復旧支援隊の派遣と支援物資の運搬並びに義援金の受付を開始いたしました。さらに「熊本地震緊急災害対策本部」を中央に設置するとともに、熊本教区教務所(本願寺熊本別院内)に「現地緊急災害対策本部」を設置し、被害状況の把握に努め、物心両面にわたる支援をいたしております。

未だ余震が続くなか、先行きの見えない不安を抱えながらの生活は、想像を超えた厳しいものであることと存じます。被災地等におきまして救援や復興支援などの活動にご尽力されておられる方々に深く敬意を表しますとともに、皆様の安全と一日も早い復興を願い、宗門として全力で支援してまいりたいと思えます。

2016(平成28)年4月19日

浄土真宗本願寺派  
総長 石上智康

私にお寺への入会を勧められました。専門的でありかつ温かみのある面白い運営の方々と一緒に、お寺を助ける仕事をする機会を得たのです。またそれだけでなく、牧野和尚は私に説法を聞きそれを実生活で活かすよう触発してくださいました。それ以前にも仏教の教えは読み考えてきました。ですが、心の深い部分を使って教えを「感じ」、仏教が歓びと平和をもたらすことを本当の意味で垣間見ることが出来たのは、牧野和尚に教えていただいたその時が初めてでした。

お寺に戻ると、そこはまるで家のような居心地の良さを感じました。まだ幼かった頃に親戚のようにしてくださっていた年配の方々が温かく迎え入れて下さっているのが分かりました。その方々は子供に教えるように丁寧に助けて下さりだったので、深い感謝の念を抱くと同時に、そのご年配方への恩返しとなるように、どのような形ででもお寺の助けになりたいという気持ちが生ええました。私を子供の様に目をかけて下さること、お寺と浄土真宗への惜しみない働き、労力、そして思いやりに対して、私がいかに尊敬しているのかを示す良い機会でした。自分の能力を最大限に活かしてお寺の力になろうというボランティアの精神はどうやら私の遺伝子の中に組み込まれていたようです。

カナダ浄土真宗として全国のボランティア活動に参画することで、仏法を共に学ぶ友人たちがいるいろいろな地に出来ました。彼らもまた教えを拡め浄土真宗のお寺を支えることに心血を注いでいました。彼らと仕事をすると、仏法への大きなエネルギーが醸成されてきて、私という存在を支え向上させてくれます。素晴らしい友を持ち、カナダのお寺の支えとなれる機会を得ている私は何と幸運なことでしょうか。

三宝である仏陀、仏法（仏陀の教え）、サンガ（教えに従う者

たちの集まり）は私の人生のどの段階においても生活の中で変わらずに重要な存在として在り続けたのだと、今となってはそう思います。感謝、思いやり、理解、共感、そして疑問を持つ心への価値観は幼かった頃のお寺とのかかわりの中で形作られました。ですから、今度は自分が子供たちと同じような経験を与えてあげられるようにと考えています。そうすれば、子供たちもまたいずれは同じようにお寺に戻って来るようになるでしょう。子供たちが、なぜ私がお寺のために多くの時間を費やしているのかを理解してくれる日が来ることを願っています。

私は石浦夫人の呼びかけに応える為に、今まで受けた恩を返す為に幅広いお寺の活動に従事しております。お世話になった年配の方々、私のコミュニティ、サンガ、そして私自身を含めた私の家族をより成長させてくれる、そんな仏の教えを守り実践しているのです。

南無阿弥陀仏

合掌  
ワキサカ・エイミイ

# 佛心

2016年5月

浄土真宗

トロント本願寺



## 私がお寺でボランティアをする理由

なぜお寺でそんなにボランティアするの  
か。子供たちがよく私に尋ねてきます。

プログラムを作ったり近場から西海岸までの色んな人と働いたりする中で、私が四苦八苦している姿しか子供たちは見ていません。ですからそこまでする価値はあるのかと問うわけなのです。

子供の頃、私にとってお寺は第二の家みたいな場所でした。親戚と会ったり、法話に参加したり、日本の伝統舞踊を学んだり、友達を作ったりと、数多くの社交的な行事に参加しました。ちなみに一番のお気に入りにはルンビニでのサマーキャンプでした。人生の伴侶と出会ったのもお寺でした。

両親の参加する会議、ボランティア、そしてお寺主催の行事が終わるまでの長い時間を、友達と遊びながら過ごしていたことは今でも覚えています。同時に、お寺との繋がりは日常生活の中にもありました。祭壇、祖父母の遺骨と戒名。炊き立てのご飯や他の食べ物をお供えし念仏（南無阿彌陀仏）を唱えながらお辞儀することは私たちの日常となっていました。墓前での盆の儀式やご先祖様を供養するための伝統舞踊に参加することは、大事な習慣となっておりました。

お寺の問題をどうやって乗り切るかとかプロジェクトをどうするかという話を、両親はよく夕食の場で話し合っていましたし、私や兄弟たちの教育の為にも私たちの意見もよし尋ねてきました。私が学校から帰ってくると、家で父と僧侶の方（近くのお寺の方から遠くは日本のお寺の方まで様々な方々）が居間で議論していたなんてことも度々ありました。両親ともにお寺と地域でのボランティア活動に多くの時間を費やしていました。家にいないことも多かったので、両親は実の子供たちよりも赤の他人の方を気にかけているのではないかと疑うこともありました。

石浦マリイ夫人（トロントの石浦和尚の御婦人）がカリフォルニアに旅立つ前にトロントに残る友人たちに別れを告げる時、私をしっかりと見つめて、私にはお寺を支える十分な力が有り、今が当にお寺に参加し恩返しをする時だと仰いました。彼女のその言葉は私だけでなく、このお寺に独り立ち出来るようにと今まで大事に育てられてきた、同年代の子供たち全てに対して語りかけているものであることだと私は感じ取りました。

私はその呼びかけにすぐには応えませんでした。お寺から離れ、大学、仕事、結婚と家族にそれぞれ順に集中していききました。この時期には私は父のお寺での幅広い活動と日系カナダ人への戦後補償の運動を傍らから眺めていました。ある時、両親が時間と労力をお寺の活動に費やしたことは、私たちが自分たちで解決しないといけない課題をきちんと認識させ与えてくれたいたともいえ、私が自負心を持った自立した大人になるうえで欠かせないことだったのだと気が付きました。

何年も後、ハワイから牧野和尚がいらっしやった時、転機が訪れました。アレン・トム氏とコヤマ・ヒック氏が夫のラリーと